

面白い本だった。たとえば、

- ・「動あれば反動あり」、「慣性の法則」、「鹿威し」の三つ——たいいてい分野の問題に適用できる
- ・「日本人は単純な民族で、外から刺激してやれば予想どおりの反応をする」「軍事力はすばらしいが、情報戦略などのソフトウェアはまるでダメである」「戦争の経験が乏しいため、非常に教科書的に反応する」
- ・私の持論ですが、国際政治の真髄とは、「早く見つけて遅く行動し、非常に頑強に主張し続けながら一瞬にして妥協する」こと。
- ・「日本の社会を操るのはきわめて簡単だ。いくつかのターゲットだけをねらって、それぞれ少しずつ品を変えながら集中的に働きかけたら、日本の中枢部はいっぺんに洗脳できる」
- ・三十年を超える長期の人口予測は、ほとんど当たったためしがありません。

私が考えるのは、前の項で取り上げた「動あれば反動あり」に加えて、「慣性の法則」と「鹿威し」の三つです。これらを用意しておけば、とりあえずたいいてい分野の問題に適用できるでしょう。

たとえば、選挙とか国内政治の派閥争いとかという問題には、前にも述べたように、「動あれば反動あり」というセオリーで、真相が見えてくるはずですが、一つの現象を見たときに、**必ず逆の働きがあるぞ**、という予測ができます。

二つ目のセオリーは「慣性の法則」です。これもニュートンの運動法則の一つで、「静止または、等速直線運動をする物体は、外部から力を受けないかぎり、その状態を変えない」ことをいいます。簡単にいえば、ある質量を持って動き出したら、その質量が大きかろうと小さかろうと、**止まることがない**ということです。

たとえば、何かとてつもなく大きな開発計画があったとしましょう。大きいプロジェクトですから、たくさんの審議会や各省庁も加わってきます。その計画は、動き出したら、そのスケールの大きさのまま止まることはありません。

・・・

そしてもう一つが「鹿威し」です。「鹿威し」というのは、竹筒に少しずつ水を注ぎ入れていき、水が溜まったときにその重みでひっくり返って水がこぼれる装置のことで、もともとは鳥獣を追い払うためのものでした。

これを社会問題に置き換えると、いろいろなものが見えてきます。景気問題、国際情勢、日中関係など、ここ数年、同じような状況や議論が続いています。どれも同じ状況に見えますが、じつは「鹿威し」の竹筒の水のように、しだいに溜まっていきます。

それがあるとき、バランスを崩すほど重くなって、**局面の大転回**が起きるのです。

その資料の中に、非常に興味深いものがありました。当時の日本の指導部をイギリス人がどう見ていたかという英語の資料です。

そこには「日本人は単純な民族で、外から刺激してやれば予想どおりの反応をする」「軍事力はすばらしいが、情報戦略などのソフトウェアはまるでダメである」「戦争の経験が乏しい

ため、非常に教科書的に反応する」などと書かれていました。

当時のイギリス人は、日本人の先の行動を読んでいたことがうかがえます。しかも、その「日本人研究レポート」は、戦時中に、イギリス軍部はもちろん、アメリカ軍部にもレクチャーされていたというのです。

欧米人の議論を聞くときは、欧米文明は「魂の世界の使命感（ミッション）」と「俗世の世界はゲーム感覚」という二重性を持っている、ということを理解してはなりません。

私はこの欧米精神の二重構造を、留学時代に強く感じました。現地の社会に入ってアルバイトをしたり、いろいろな人とつきあうことで、「欧米人は、自分では絶対実現しないとわかっていながら、口では理想論を言うのだ」ということがわかってきたのです。

彼らは、つねに理念を唱えなくてはならない社会で生きています。そうしないと、自分の魂は「救われない」という、強迫観念があるからです。実現不可能とわかっていても、一生懸命理想を語ることが、自分の魂の証明になります。それを聞く人も、「半ば嘘だ」とわかっていながら受け入れ、文字化したり情報として流したりします。

石積み構造の知性ですから、基礎になっているものが崩れると、大きな喪失感で、もういっさい行動ができなくなってしまいます。イスラム教をある程度崩さないとな近代化できないとわかっていても、それを崩すことなどとうていできません。イスラム教で西欧に対抗するしかないのです。これは、思想構造が十字軍時代の世界と変わっていないことを意味します。それは、キリスト教世界も同じでしょう。

勉強すればするほど、「イギリスは恐ろしい国だ」と思いました。

そういうイギリスのような戦略国家と対抗するにはどうすればいいか。それを考えるには、この国家を動かす要人が一生懸命になっているものを知ればいいはずです。

彼らは、核兵器やインテリジェンス（諜報）を一生懸命に研究していました。そこからして日本とは、まったく違うわけです。

さらにイギリスだけでなく、一般に欧米の大国というものは、「地の果てまでも占領していこう」という思いを心の底につねに抱いていることが見えてきました。そのドライブ（衝動）の強さは何なのかという疑問から、「西洋文明とは何か」「キリスト教とは何か」ということにまで、考えは広がりました。そして行き着いたのが、キリスト教と絶対的正義観が、戦略的効率の世界といったいどう結びついているのか、ということでした。

私の持論ですが、国際政治の真髄とは、「早く見つけて遅く行動し、非常に頑強に主張し続けながら一瞬にして妥協する」ことだと思いますが、これは外交に限らず、すべて世の中はそ

ういうパラドックスでできています。

人間社会には、古くから「二律背反」ともいえる対立・矛盾する幾組かの価値が存在してきました。ものの見方・考え方からしても、この「対立価値」の扱いは重要なポイントになります。世の中にあるむずかしい問題の大部分には、こちらを立てればあちらが立たず、といった対立する価値が、お互いに譲らずにその存在を主張しているからです。

たとえば、いまの日本という国を見たときに浮かび上がってくる「物と心」「進歩と伝統」「個人と共同体」といった**組み合わせ**を考えるとわかりやすいでしょう。

世の中は、これらのどちらか、とくに物とか進歩、個人といった一方に偏した価値に比重がかかると、その当座は繁栄するよう見えますが、いずれ社会に無理が出たり、活力を失ったりして衰退の原因になってしまうのです。

イギリスでは「**It is old.**」という言葉があり、「それはいい」という意味が込められています。「古い」という言葉が「いい。信用できる。親しめる」という意味で使われているのです。私は「古い」と言われて、もうダメなのだと思っていましたから、これは留学生活最初のカルチャーショックでした。

これは、「百と百をイコールにする」という論理に基づいています。**つねにすべてを等式に置いていくこと**。これは、算数ではなく数学であり、**論理**です。

日本人は、本能的・反射的に引き算をします。欧米では、引き算の計算をするという発想がありません。算術という伝統がなく、引き算という訓練を受けていないから当然ですが、彼らが日本人と違って、直感よりも形式的な論理で動いていることを如実に示しています。

日本人のように反射的にものごとをこなせば、早く処理できるし、能率もいいでしょう。人間というのは、反射のできることのほうが肌身感覚、つまり自然な「人間」に近いのです。

これには、直感や勘も含まれます。**私たち日本人は、直感、勘、肌身感覚といった感性を人間的であると感じます**。そして、結局は感性も論理も、融通無碍(ゆうずうむげ)に混ぜ合わせて考えています。

他方、**欧米や中東、インドなど南アジアの人は、感性と論理を峻別**します。ですから、勘だけで動いたり、反射的な判断で決めたりすることを怖がります。

ヨーロッパでも南のほうのイタリアやスペインでは、目分量で「出たところ勝負」、無秩序もそれほどいやがりません。何においても直感や情感を大切にしますし、だからこそ、自由奔放な芸術も生まれ、明るい歌を軟いながら感性を大切に生きています。

近代日本は、欧米に追いつけ追い越せと、西欧の論理である「効率化」と「合理化」を求めて走ってきました。しかし、そのひずみが企業にも個人にも、社会全体にも、今日さまざまな

事件や喜ばしくない現象として現れてきています。

その原因は、西欧や中国で育った「**支配の哲学**」にあると思っています。

昔、中国では、科挙の試験で合格して高級官僚になった人たちは、試験合格までは儒教、つまり孔子・孟子を勉強し、合格した瞬間から、韓非子・孫子・呉子などを勉強し始めました。儒教の「人はかくべし」ではなく、「人間支配、国家運営のためにどうしたらいいのか」「世の中は本当はどうなっているのか」の勉強です。受験勉強の間は、「正義とは」「正しいことは何か」と建前の勉強をし、受験を終えると、**支配の哲学、つまり「効率の世界」**に入るわけです。

儒教というのは、いふなれば半端な教えで、効率や戦略を問う韓非子や孫子の世界に支えられて存在しています。儒教が「支配の哲学」ではなく、「支配を正当化するための哲学」といわれるのは、そのせいです。中国に儒教の伝統が強いということは、裏からいえば、マキャベリズムが異常に発達した国ということになるでしょう。

トインビーの見解で注目に値するのは、日本だけで一つの文明圏をなしていると言っていることです。トインビーだけではなく、最近ではアメリカの学者ハンチントンも同じことを言っています。

その七つとは、「**西欧キリスト教文明**」「**ロシア正教文明**」「**イスラム文明**」「**ヒンズー文明**」「**中華文明**」「**日本文明**」「**中南米ラテン・アメリカ文明**」です。

ハンチントンは日本文明について次のように言っています。

「一部の学者は、日本の文化と中国の文化を極東文明という見出しで一くくりにしている。だが、ほとんどの学者はそうせずに、日本を固有の文明と認識し、中国文明から派生し、西暦一〇〇年ないし四〇〇年の時期に現れたと見ている」

どうして、日本一国で一つの文明圏を築いているという見方が広まったのでしょうか。それは、日本が島国であることと無関係ではありません。

・・・

しかも、「**絶海の孤島・日本**」は、非常に温暖で、自然の宝庫でもあります。きれいな水にも恵まれ、「無駄使い」のことを形容して「湯水のごとく」という国はおそらく日本だけでしょう。日本人にとって自然は、人間に多くの恵みをもたらすものでした。

こうした**日本独特の風土は、日本に独自の文明を築かせました**。風土は文明をつくり、文明は人間の考え方や心のパターンを決定づけます。

・・・

日本を代表する文明論の大家である腐樟忠夫氏は、トインビーやハンチントンと同様の議論を展開し、「**日本は、文明の上で、アジアではない**」と断言しています。

私が留学していた七〇年代、サッチャー政権誕生のすぐ前には、先進国として二回目の衰退期に入りました。その究極の年、一九七九年には、**財政が完全に破綻したロンドン市は、ゴミの収集すらできなくなりました**。リージュント通りやピカデリー・サーカスのような観光名所でも、ゴミが二階の窓を塞ぐほどに積み上がって、名物の二階建てのバスがゴミの谷の間を走っているという感じでした。

また、当時のイギリスでは、通行料が無料にもかかわらず、どの車も高速道路に入りながら

ず、一般道路を走りました。高速道路は財政破綻でメンテナンスがものすごく悪く、モウモウと砂塵を巻き上げて車が走るからです。高速道路を一度走るとフロントガラスが傷だらけになるほどでした。

私が住んでいた田舎町も大変でした。地方財政が崩壊したため、**火葬場が動かない**のです。それでも棺は次々と運び込まれてきます。夏などは、異臭を放つわが犬が吠えるわで、遺族のほうでパニックを起こすほど悲惨な状況でした。近くの町では**遺体の処理ができず、青いシートを掛けたまま放置**してありました。まるで戦争中の空襲の跡のようでした。

福沢諭吉は『**やせ我慢の説**』の中で、「**利あらばそちらに転び、権力の強い者に媚びる輩**」を痛烈に批判し、やせ我慢をしてでも「**独立自尊**」を保つ気概の大切さを説いています。

そして自らも、新政府は外から監督するのが一番いいとあって、自分のふるまいの美学を曲げず、権力に与(く)みすることはけっしてありませんでした。福沢の『**やせ我慢の説**』こそ、知識人の本道、学者としてあるべき正しい姿だといえるでしょう。

たとえば、もし小泉元首相が靖国参拝で「腰砕け」になったら、日本外交の基礎が大崩れになってしまいます。これは**独立国家・日本として大変危険な局面**だ、という強い危機感から、活字を通してはっきりと私の意見を主張しました。それは歴史認識だ、A級戦犯がどうだの話ではなく、**国家の生存と主権という重大事**だったからです。

「日本の社会を操るのはきわめて簡単だ。いくつかのターゲットだけをねらって、それぞれ少しずつ品を変えながら集中的に働きかけたら、日本の中枢部はいつべんに洗脳できる」

これは、前述のゾルゲが残した、日本人が大いに教訓とすべき証言です。

簡単に操れる日本を、ゾルゲは「蟹」にたとえています。日本という国は、蟹の甲羅のように最初はガードが固くてなかなか中に入れません。仲間同士内側でまとまっていて、外国人にはまったくのよそ者扱いで排他的だ、というのです。

『**民主主義を世界に押し広げたい**』などと偉そうなことを言うのはひと握りのエリートで、奴らの本質はカネと権力の亡者だ。こういう連中がわれわれのカネと力を使ってイラクやアフガニスタンを攻めて失敗し、われわれにトラブルをもたらしている」

これが一般のアメリカ国民の意識です。

大衆をいかに騙して税金を取り、権力を握って世の中を動かすか、その「**騙しのシステム**」がアメリカ政治の正体だ、というわけです。

「平和」という言葉を、私たちは、どれほど愛しながら戦後を生きてきたことでしょうか。しかし、**一国だけの平和主義が成立しない**ことは、すでにわかりきった話です。

・・・

日本国憲法が発布されたとき、「これは、世界の魁ともなるべきすばらしい憲法である」と教えられた私たちですが、その後、**日本のあとに続いた国は皆無**なのです。

たとえば、「A イコール B、B イコール C、ゆえに A イコール C」という三段論法によって導かれた「A イコール C」という答えは、どこから見ても疑う余地などないように思われます

が、じつはここに大きな落とし穴があります。

人間は次々と出される命題や情報の展開に出会うと、「次は何が出るのだろう」と、次を「待つ姿勢」、つまり受け身に回る姿勢ができあがってしまいます。

すると、最初の「A イコール B」のところで疑う余地があったとしても、この「待つ姿勢」が勝ってしまい、とりあえず、という気持ちで**予定調和的に最初の「A イコール B」を正しいものと理解してしまう**のです。「B イコール C」についても同様に、どんどん引っ張っていかれます。そこにディベートにおける三段論法のテクニックがあるわけです。

人間は非常に弱いもので、よほどのへそ曲がりでないかぎり、立て板に水を流すように数字や論理を畳み込まれると、すっかり相手のペースに巻き込まれ、**自分で考えるまえに、「そうかもしれない」と納得しよう**としてしまいます。あるいは「そう思いたい」という欲求さえ無意識に生じさせてしまうのです。

しかし、身構えることなく情報を集めるということは、口で言うほど簡単ではありません。人間は弱いもので、ついつい先のことを心配して、あれやこれやと雑念が入り、**自分にとって都合な情報は無意識にフィルターにかけて情報の事前選別をする**という、「甘い誘惑」に負けてしまいがちだからです。

それを解決するための一つの方法として、情報を集める人と、情報を選別する人に分業する「別の頭」の使い方があります。

・・・

理想としては、依頼者と利害関係がなく、**顔色をうかがう必要がない**人で、**淡々と仕事をこなすような職人気質**の人がもっとも適任者といえるでしょう。

現在のありようをそのまま先に伸ばして未来を考えようとして間違えてしまった、最近の典型例を一つあげてみます。

それは、数年前から問題視されている「少子化」です。このまま出生率が低下していけば、二〇五〇年の日本の人口は七千数百万になるとか、二一〇〇年にはもっと減って半減するだろうとか、さまざまな予測がなされています。

「現状がこのまま推移するだろう」という投影史観的な考え方から、そうした予想がなされるのです。厚生労働省も、同じような視点で、二〇五〇年の日本の人口予測を発表しています。

しかし、三十年を超える長期の人口予測は、ほとんど当たったためしがありません。

日本より早く先進国になって、日本より先に少子化、つまり出生率の低下に悩んだ国は、いまの日本と同じような予測をしました。五十年後の人口はこんなに減る、これは大変なことだと問題視したのです。

しかし、それらの予測はほとんど外れています。イギリスの場合、二〇世紀初頭に出生率が大きく低下しました。政府をはじめとする研究機関は、この現象にびっくりし、十七パターンもの人口予測を出しました。それらを調べてみますと、十四例まで完全に予測が外れています。あとの三例は、人口増の予測でしたが、それも現実を大幅に下回っています。

アメリカの場合、出生率が下がり始めたのは一九二〇年代でした。経済の大バブルで、女性が社会に進出するようになり、いわゆる禁酒法の時代で、人びとが刹那的になり、出生率がどんどん減っていったのです。一九二九年の大恐慌に続く三〇年代は大不況下で、やはり出生率はさらに下がり続けました。

これらの現状を踏まえて、アメリカ政府は、一九三五年にアメリカの長期人口予測を発表しました。そこには、「一九六五年になったとき、アメリカの人口は三分の二に減っているだろう。大々的に移民を入れるか、それともこのままやっていくかの大変な分かれ道だ」という論調が見られます。

しかし、この予測は大幅に外れました。第二次大戦が始まると、急に結婚率が上がり、それにつれて出生率も大幅に上がっていきました。これがずっと一九六五年まで続き、「大ベビーブーム」時代が出現したのです。アメリカでも、人口予測とはまったく正反対の結果になりました。

何十年かに一度ぐらいは、国はこうした体験をするものです。誰も予測できない「断層的な変化」です。歴史には必ず、それまでの状況と一八〇度違う方向に動き出す、という「歴史的な転換点」というものがあるのです。ですから、日本が問題視している少子化問題も、予測どおりにいかない可能性が高いといえるでしょう。

そういう意味でいえば、戦後の五十年間、右肩上がりで進んできた日本の状態は、かなり例外的な時代だったといえます。

日本人」を明確に意識する

「自分はいったい何者であるのか」を知り、自分の自画像をはっきり持てば持つほど、ものごとに対して、効率的に対処できるようになります。日本という国にしっかり足場を持っていることによって、物心両面での安定感ももたらされます。

とくに「精神の安定」は重要で、自分が何者であるかというアイデンティティが精神を支える根幹の部分をつくり出します。もちろん、それにとらわれすぎてはいけませんが、けっして甘く見てはいけないものです。

アイデンティティという考え方は、どういう姿勢や気持ちで使われるかによって、持っている意味合いに雲泥の差が出ます。たとえば、日本人ということであれば、後ろ向きの心で考えるときは、「どうせそういう国民性だから」と、都合のいい言い訳にもなってしまいます。いまさら変えることなどできないのだから「しょうがない」と、後ろ向きでとらえるか、それを誇りや安心感としてとらえ、自分の「パワーの源」にするかは、結局、自分の心のあり方次第

です。

「考え方」と「心のあり方」というものは、ほとんど一つのものである、といってもいいと思います。

日本人の美点、つまり日本の強みは、明らかに日本人の「心のあり方」です。じつはこれこそ、西欧はもちろんのこと、中国や東南アジアの国々に対しても、その安定した精神性で圧倒的に優位に立っているもので、とても重要です。

「騙すより騙されろ」、こんな処世訓を親が子どもに教える国は、世界中どこへ行っても見ることはできません。外国人にはとても考えられないことで、騙されるくらいなら先に騙したほうがいいというのが、多くの国々の考え方です。

前にも触れたように、日本特有の神道の考え方の基本に、「明あかい・浄きよい・正ただしい・直なおい」があります。

「赤き、清き、正しき、直き心」です。とくに直き心（素直な心）というのが絶対の価値を持っています。「三種の神器」の「鏡・剣・玉」は、日本の大切な「三つの心」を表し、古来、日本人が一番大事にしてきたものです。それはつまり、「素直さ、勇気、慈しみ」の三拍子そろって初めて人間といえる、というわれわれのアイデンティティです。それをつねにめざす民族だからと、胸を張って誇りに思っているのではないのでしょうか。